

## 司馬光と欧陽脩

中尾健一郎

六年)に従う。

### 一 司馬光と欧陽脩の交流

司馬光と欧陽脩の交流が始まったのは、嘉祐三年(一〇五八)欧陽脩が権知開封府、司馬光が開封府推官となった時である。この時、欧陽脩は五十二歳、司馬光は四十歳であった。両者が詩を応酬した形跡は、翌嘉祐四年に王安石の「明妃曲」にそれぞれ唱和した詩以外に見あたらない。しかし、後の元豊二年(一〇七九)司馬光が欧陽脩の「尚書刑部郎中孫公墓誌銘」(『文忠公集』卷三三「居士集」卷三三)を読み、「惘然として復た公に見えて傍に侍坐するを得るが如し」と追憶しているのを見れば、詩の応酬こそ殆ど見られないものの、両者の関係は良好であったようである。また司馬光は、欧陽脩の文学を高く評価し、次のように述べている。

今尊伯父、既に欧陽公の之れが墓誌を為る有り。欧陽公の声

北宋の司馬光(一〇一九〜一〇八六)は、文学の方面では殆ど重視されることのない文人である。しかし、現実には少なからぬ詩文を作り、またその文学も当時においては影響力を持つものであった。一方、欧陽脩(一〇〇七〜一〇七二)は周知のように唐宋八大家の一人であるばかりではなく、古文の復興に勉めた北宋文壇の大御所である。両者は共に古文家という点では共通しているものの、文学的な繋がりについて言えば、詩話の執筆を除いて注目されることは稀であったように思われる。小論では、従来注目されることなかった両者の影響関係について考察する。なお、小論で取りあげる司馬光と欧陽脩の詩文は、基本的にそれぞれ『温国文正司馬公文集』(四部叢刊初編所収、以下、『温公文集』と略記)、『欧陽文忠公集』(四部叢刊初編所収、以下、『文忠公集』と略記)に基づく。また、その事跡については、清・顧棟高『司馬太師温国文正公年譜』(『司馬光年譜』所収、中華書局、一九九〇年)、劉德清『欧陽脩紀年録』(上海古籍出版社、二〇〇

名は以て天下を服せしむるに足り、文章は以て後世に伝ふるに足ると謂ふべきが如し。他人、誰か能く之れに加へんや。愚、区区たるを意ひて願ひ欲す、足下の止だ歐陽公の銘のみを刻し、隧外に植して以て碑と為さば、則ち尊伯父の名のみ、自ら無窮に光輝あるべきことを。

〔司馬光「答孫察長官書」『温公文集』卷六二〕  
 孫察という人物に伯父孫甫の神道碑を依頼された司馬光は、歐陽脩の名声は天下の人々を心服させるに足り、その文章は後世に伝えるに足るものであると言う。そしてこれに何を付け加えることがあろうかと神道碑の作成を固辞しているが、これを見てもわかるように歐陽脩の文学は、司馬光にとって賞賛に値するものであった。

ただ、司馬光と歐陽脩は、常に良好な関係であったというわけではない。少なくとも二度の衝突を体験している。一度目は、科挙の問題についてである。よく知られていることであるが、北宋の当時は、北方出身者と南方出身者との間に対立関係が見られることがあった。司馬光と歐陽脩について言えば、前者は山西出身、後者は江西出身である。英宗の治平元年（一〇六四）八月に司馬光が、科挙の及第者に北方出身者より、南方出身者が多く見られることから、科挙の及第者の出身地の分布に偏りがあることを憂い、「貢院乞逐路取人状」〔『温公文集』卷三〇〕を上奏した。ところが、歐陽脩はこれに対して「論逐路取人札子」〔『文忠公

集』卷一一三「奏議」卷一七〕を上奏し、南方人が北方人より及第者が多いのは競争力の差であることを論じて、司馬光の建議を退けたのである。二度目は、「濮議」の問題である。これについては既に小林義廣氏の研究において委細が尽くされているので重複を避けるが、簡単に紹介すると、仁宗の養子となった英宗の実父の呼称をめぐる、司馬光及び台諫の一派と、歐陽脩を始めとする中書側とが二手に分かれて激論を交わし、最終的には歐陽脩側の意見が採用されたという事件である。この二度の対立の外に、歐陽脩と司馬光の間には国家観や経書観についても見解が分かれており、その思想や信条には異なるものがあった。

しかし、濮議で鋭く対立したにもかかわらず、両者の人間関係が破綻をきたすことはなかった。歐陽脩は濮議の後、治平四年（一〇六七）に「薦司馬光札子」〔『文忠公集』卷一四「奏議」卷一八〕を上奏し、司馬光を翰林学士に推薦している。小林氏が司馬光の「書孫之翰墓誌後」〔『温公文集』卷七九〕を例に挙げて述べるように、欧陽脩は甚だ公正な人物であり、それは司馬光も認めるところであった。それというのも、欧陽脩自身が恩讐を超えた境地を見据えていたからであり、司馬光は文学ばかりでなく、欧陽脩のこうした人柄を高く評価していたと見られる。司馬光と欧陽脩は、濮議等の問題では対立したものの、晩年に至るまで交流があり（後述）、政治的な立場の相異にかかわらず、良好な人間関係が保たれていたと見られるのである。

## 二 司馬光に見える欧陽脩の影響

司馬光が欧陽脩の影響を受けたと目されるもののうち、第一に挙げられるべきものは、『統詩話』の執筆であろう。司馬光は『統詩話』の序に次のように述べる。

詩話は尚ほ遺れる者有り。欧陽公の文章の名声、及ぶべからずと雖も、然して事を記すは一なり。故に敢へて続けて之を書す。

(司馬光「統詩話序」『増広司馬温公全集』卷一〇一)。

この序には、司馬光が欧陽脩の『六一詩話』を継承するものとして『統詩話』を著したとある。その意図が那邊にあったかについては後述することにして、まず司馬光と欧陽脩との間に共通して見られる事象について論じたい。

### (ア) 醉翁と迂叟

司馬光と欧陽脩の両者が、共に唐の白居易の閑適の生活を受容していることについては、既に先行研究があるが、欧陽・司馬の両者の白居易受容が顕著に現れているものに別号がある。欧陽脩の別号は「醉翁」であるが、これは慶曆六年(一〇四六)左遷の地である滁州にて唱えられ始めたものである。欧陽脩が醉翁と号したのは、洛陽に退居した白居易のように、名利の世界に拘束されない自由な精神生活を求めてのことであったと言えるだろう。

もちろん、欧陽脩は必ずしもこの境遇に安住したわけではなからう。小林義廣氏は、欧陽脩が後年の詩に「我時に四十にして猶ほ彊力なるも、自ら醉翁と号して聊か客に戯る」(「贈沈遵」『文忠公集』卷六)などと詠んでいることから、彼が「醉翁」と名乗ったのは韜晦であったと見なす。司馬光が熙寧六年(一〇七三)洛陽にて「独樂園記」を著し、「迂叟」と号したことは、自身の政治的立場を韜晦する行いであったことについて筆者は嘗て論じたことがあるが、そうすると司馬光は欧陽脩を踏襲し、欧陽脩と同じく政治的に不利な立場に置かれたことを機縁として、白居易の詩句を別号として用い、自らの立場を韜晦したと言えるだろう。別号の問題をみてもこのようであれば、司馬光に対する欧陽脩の影響は、甚だ大きなものであることが予想される。

### (イ) 真率会と会老堂の集会

別号の外に、司馬光が欧陽脩の影響を受けたと見られるものに、「真率会」と称する老人集会(耆老会)を営んだことが挙げられる。王永照氏は、欧陽脩が青年期に洛陽で催した「八老」の集会は、白居易の尚齒会の影響を受けたものであり、司馬光らの耆老会も、遠くは白居易に倣い、近くはこの「八老」の集会を慕ったものであると見る。しかし、司馬光に先行する耆老会であるからといって八老の集会と真率会とを直接結びつけることに、筆者はいささか躊躇を覚えるものである。何故なら確かに欧陽脩

は司馬光に影響を与えたであろうが、当時の歐陽脩はまだ少壯の士大夫であり、司馬光とは社会的地位や政治的環境が大きく異なるからである。また集会が行われた時期も、司馬光の洛陽時代と四十年ほど隔たっており、皇祐二年（一〇五〇）に北宋で最初に退休した高級官僚によって実際に開催された杜衍の五老会の方が時期的により近い。筆者は、司馬光の耆老会は、歐陽脩の影響を受けているとしても、それはさらに直近の耆老会の影響を受けたものであると考える。それは歐陽脩晩年の老人集会である。

王安石の新法に反対した歐陽脩は、熙寧四年（一〇七二）知蔡州（河南省汝陽県）を辞し、潁州（河南省鄆陵県）に退隠した。そして嘗ての同僚であり、同じく致仕している趙概と会合を持っている。それが会老堂の集会である。

正献公（呂公著）、潁に守たりし時、趙康靖公概、宋自ら歐陽公を潁に訪ふ。公二人と与に歐陽公の第に会燕し、因りて其の堂に名づけて会老堂と曰ふ。

〔呂希哲『呂氏雜記』卷下〕

趙概は南京心天府（河南省商丘市）より遠路を厭わず潁州を訪問し、歐陽脩と欵楽を尽くした。呂公著が潁州に知事として在任したのは、熙寧三年四月から熙寧五年までの期間であり、また歐陽脩が呉充に宛てた書簡の題注に熙寧五年の年号が見えることから、この集会は歐陽脩の最晩年に行われたことがわかる。次を見よう。

近ごろ叔平（趙概）に、南都自ら恵然として訪はる。此の事、古人の重んずる所なるも、近世絶だ稀なれば、始めて風月の閑人に属するを知るなり。呵呵。「会老堂」三篇有り。方めて石に刻み、続けて納む。

〔与点正献公『文忠公集』卷一四五「書簡」卷二〕

この書簡に拠れば、歐陽脩は「会老堂」詩三篇を石に刻んで記念としている。また、この集会を知って韓琦が、「洛社 図を成して茲に合し易し、越溪 權を回らずは彼れ何の情ぞ」と詠む詩を寄せたことからわかるように、「会老堂」の集会は白居易の尚齒会（洛社）を多分に意識したものであったと見られる。

ところで、歐陽脩が潁州にてこのような詩会を開く背景には、いかなる事情があったであろうか。これについては、蘇軾の次の文章が参考になるだろう。

伏して惟んみるに、致政觀文少師、全徳は名をなし難く、巨材は器とならず、事業は三朝の望にして、文章は百世の師たり。（中略）而るに乃ち力めて未だ及ばざるの年に辞し、托さるより退きて能はざるを以て止む。大勇は怯むが若く、大知は愚なるが如し。至貴は軒冕無くして栄え、至仁は導引せずして寿し。其の得る所を較ぶれば、孰か昔より多からん。軾、知を受くること最も深ければ、聞道く自るところ有り。外には天下の為に老成の去るを惜しむと雖も、而して私に明哲保身の全うするを喜ぶ。

(蘇軾「賀歐陽少師致仕啓」『東坡集』卷二七)<sup>25)</sup>  
この文章の内容は、主には歐陽脩の致仕にあたって、彼の功績を顕賞し、その退居を惜しむものである。しかし、蘇軾は「明哲保身の全うするを喜ぶ」と、歐陽脩が朝廷の佞臣たちに陥れられることを避けるために、致仕することにより明哲保身の道を全うしたと慶賀している。蘇軾の文章にも見えるように、当時の歐陽脩は致仕するにはまだ若かったから、政争から身を避けるためにやむを得ず致仕したということは十分に考えられることである。<sup>26)</sup>

歐陽脩は不遇な時期を「醉翁」や「六一居士」と号し、風流な生活を楽しむことで乗りきろうとした文人であるが、「会老堂」の詩会もそうした風流な生活の一環として営まれた。そして洛陽に退居し、晩年の歐陽脩と同様の境遇にあった司馬光は、歐陽脩を意識して欧陽脩の「詩話」「別号」「耆老会」の三つを継承し、不遇な境遇に耐えつつ現実に向き合ったと見られる。その外にも司馬光が欧陽脩から受け継いだものがある。それは「清風明月」の愛好である。

### 三 司馬光と欧陽脩における「清風明月」

司馬光が、欧陽脩に最も大きく影響を受けたのは、逆境に在りながら、挫けることのない精神の在り方であったと考えられる。その例として、司馬光の「独樂園記」を掲げよう。

迂叟謝して曰く、叟は愚なれば、何ぞ君子に比するを得んや。自から樂しみて足らざるを恐る。安くんぞ能く人に及ぼさんや。況んや叟の樂しむ所の者は、薄陋鄙野にして、皆な世の棄つる所のものなり。推して以て人に与ふると雖も、人且に取らざるべし。豈に之れを強ふるを得んや。必ずや人の肯へて此の樂しみを同じくせんとする者有れば、則ち再拝して之れを獻ぜん。安くんぞ敢へて之れを専らにせんか。

(『温公文集』卷六六)<sup>28)</sup>

これは「独樂園記」の最後段であるが、傍線を附した部分に見えるように、司馬光は世間の人々が価値を見いださない所を樂しみの対象としている。このような俗世の価値観に反する言説は、実は欧陽脩によって表明されたものである。

山氣無四時 山氣 四時無く

幽花常婀娜 幽花 常に婀娜たり

石泉咽然鳴 石泉 咽然として鳴り

野艷笑而僂 野艷 笑ひて僂あはひてまふがごとし

賓歡正諠譁 賓は歡びて正に諠譁たり

翁醉已岌我 翁は酔ひて已に岌我たり

我樂世所悲 我が樂しむは世の悲しむ所なり

衆馳予坎軻 衆は馳せ 予は坎軻にあり

(欧陽脩「思二亭送光祿謝寺丞歸滁陽」其一)

『文忠公文集』卷五四「外集」卷四

この詩は、皇祐元年（一〇四九）潁州にて、滁州に帰る謝纘に寄せた詩であるが、歐陽脩は「醉翁亭記」を作った頃を回想して、「我が楽しみは世の悲しむ所なり」と詠んでいる。通常であれば僻地に左遷されたことを悲しむべきところを、山水を賞玩して楽しんで言うのである。このような逆境に在りながら精神の余裕を失うまいとする態度は、独樂園内の自然を愛で、「叟の楽しむ所の者は、薄陋鄙野にして、皆な世の棄つる所のものなり。推して以て人に与ふると雖も、人且に取らざるべし」と述べる司馬光に確実に継承されていると言えよう。「独樂園記」の中では、こうした司馬光の楽しみが、より具体的に表現されているが、それは次のようである。

唯だ意の適ふ所は、**明月**時に至り、**清風**自ら来たり。行きては牽く所無く、止まりては梃むる所無し。耳目肺腸、悉く己の有するところと為る。踽踽焉、洋洋焉として、天壤の間に復た何の楽しみか以て此れに代ふべき有るかを知らざるなり。

司馬光の楽しみは、明月が照らし、清風の吹く夜、独樂園の内を逍遙することである。その気ままな散策を妨げるものは何もなく、目にもふれるもの、耳に入るものをそのことによってたらされる感慨などの全てが自身の所有物になる。そして天地の間にこの楽しみに代替できるものがあることを知らないこと、独樂園内の楽しみを至高の楽しみと見なしているのである。司馬光のこ

うした自然の景物に無上の価値を与える態度は、次の蘇軾の文章に先行するものとして注目される。

夫れ天地の間、物には各おの主有り。苟しくも吾が有する所に非ざれば、一毫と雖も取ること莫し。惟だ江上の**清風**と、山間の**明月**と、耳之れを得なば声と為し、目之れと遇はば色と成す。之れを取りて禁ずる無く、之れを用ひて竭くさず。是れ造物者の無尽蔵なり。而して吾れと子の共に適する所なり。

（蘇軾「前赤壁賦」『東坡集』卷一九）

この賦は、蘇軾が黄州（湖南省黄冈市）に左遷された時期に作られたものである。司馬光のように自身の庭園ではなく、大自然の風景を、これを鑑賞する人の所有と見なすなど発想のスケールが大きいのが、やはり「清風明月」の夜に自然を鑑賞して楽しむ点では共通している。ところで、「清風明月」という言葉そのものは、李白の「襄陽歌」に、「清風明月 一銭をも用いず」とあるのを敷衍したものであるが、北宋でこれを踏襲したのが歐陽脩なのである。

**清風明月** 本無価、可惜祇売四万銭。

（歐陽脩「滄浪亭」『文忠公集』卷三「居士集」卷三）

金馬玉堂三学士、**清風明月** 兩閑人。

（歐陽脩「会老堂致語」『文忠公集』卷一三一）

「近体楽府」卷一

これらの用例を見れば、欧陽脩が「清風明月」を誰の所有物でもなく、自然を愛好する人と共に在るものとして認識していたことがわかる。南宋の許顛が指摘するように、「会老堂致語・口号」に見える「清風明月而閑人」の語は、『南史』謝諱伝に基づくと見られるが、欧陽脩は李白の詩句に加えて謝諱の故事を踏まえ、「清風明月」を風流を愛する人の友としたと言える。このような立場がよく表されているのが、次に挙げる文である。

昔者、王子猷の竹を愛し、門に造るも主人を問はず。陶淵明の輿に臥し、酒に遇へば便ち道士に留まる。況んや西湖の勝概、東潁の佳名を擅にするをや。美景良辰、固より高会多しと雖も、而るに「清風明月」、幸ひにして閑人に属す。並に遊び、或ひは良朋と結び、輿に乗ずれば、時に独り行き、鳴蛙を暫く聴くこと有り。安くんぞ官に属すると私に属するとを問はんや。曲水流れに臨み、自ら一觴して一詠し、飲に至るべし。然して意を会りて亦た傍に人無きが若し。乃ち知る偶たま来るは常に特だ来るに勝れるを。前言信すべし。有する所は己が有に非ずと雖も、其の得るところは己に多し。因りて旧闕の辞を酬して、写すに新声の調を以てし、敢へて薄伎を陳べて、聊か清歡を佐けん。

〔欧陽脩「西湖念語」『文忠公集』卷一三二〕

〔近体楽府』卷一〕

これは欧陽脩が晩年に潁州で作ったものと考えられている。東

晋の王徽之・陶淵明の風流に倣い、さらに潁州の好風景を愛でる楽しみを述べる。その上で、清風明月が閑人に属するものであること、共に遊ぶべき存在であることを主張するのである。この当時の欧陽脩は中央から離れ、片田舎の生活に甘んじていたのであるが、注目したいのは、洛陽に退居した司馬光が、この文章で言及されている王徽之・陶淵明を慕うことを「独樂園七題」の中で述べ、さらに「清風明月」を愛好する精神を継承するだけなく、これを無上の楽しみとして発展させていることである。また司馬光は洛陽にて、「朋の来るに惟だ月有るのみ、山見ゆるも錢を須ひず」（「和王安之題独楽」『温公文集』卷一四）と詠み、やはり自然を閑人の所有物であると見なしている。以上を見れば、蘇軾の「前赤壁賦」より以前に、欧陽脩から司馬光へと「清風明月」に代表される自然を鑑賞者の所有物として目する価値観が形作られており、それが蘇軾によって結実したことが分かるであろう。そしてこの三者が「清風明月」に心を向けたのは、いずれも左遷等により都を離れ、同様な境遇に陥った文人に思いを致した時であったと見える。そうした意味では、司馬光における「清風明月」は、欧陽脩から蘇軾におけるそれを繋ぐ役割を果たしたと言えるであろう。

それでは、司馬光は何故このように欧陽脩を踏襲したのであるか。案ずるに司馬光が欧陽脩に対して、長年にわたる友誼は勿論のこと、逆境にあっては自身の生活を風流なものへと昇華さ

せ、高尚な趣味に沈潜した歐陽脩を敬慕したからではなかったろうか。そしてそれゆえに別号や耆老会を行い、自然の愛好を無上の価値としたのではなかったか。合山究氏が嘗て論じたように、歐陽脩は北宋の士大夫の文人生活を切り開いた人物である。司馬光は、逆境にあった洛陽時代に、この敬愛する文人を模範として、その文人生活を継承したと考えられるのである。

### おわりに

以上、司馬光に見える歐陽脩の影響について考察した。司馬光は政争に敗れた結果、洛陽に退居することになったが、その文人生活には歐陽脩の影響が確かに見られる。そして司馬光が歐陽脩に共感し、倣ったのは、地方に在った歐陽脩が官僚生活とは別に行った活動、特に自然を愛好する生活であったことが明らかに思ったと思う。司馬光は歐陽脩に対して敬愛する気持ちが強かったことは小論に見たとおりであるが、歐陽脩にとっての司馬光はどうであつただろうか。次の文章は、歐陽脩から司馬光に宛てた書簡である。

修啓す。修、衰病を以て生を餘す。上恩の仮を寛うし、其の懇ろに至るを哀しみ、遂に帰老せしむるを蒙る。門を里巷に杜じて自り、世と日びに疎し。惟だ窃かに自ら念ふに、幸ひに早より当世賢者の遊びに従ふを得て、其の欽嚮徳義に於け

るや、未だ始めて少きより心に忘れざるのみ。近ごろ張寺丞洛より来り、恵む所の書を出だせり。其の感慰を為すや、何ぞ言ふに勝ふべけんや。起居を仰ぎ調ふを得るに因りて、宴らかにして優閑に処り、履ひにして清福を況すを承くるを喜ぶ。春候、暄和なれば、更に時に愛重を為すを冀ふ。搢紳の以て望み有る所に副ふるは、独り田畝もて垂尽せしむる人の区区たるに非ざるを以てなり。不宣。修、再拝す。端明侍読留台執事 三月初二日。

(歐陽脩「尺牘」)

この書簡において歐陽脩は、司馬光が近況を知らせる手紙を送って来たことを述べている。時は熙寧五年(一〇七二)三月、司馬光が洛陽に退居して一年後である。司馬光の書簡は『温公文集』に見えないため、どのような内容であつたかは推測するしかないが、この書簡の末尾に「青苗法」の施行に関連する内容が見えることを勘案すれば、近況の外に新法派の政策についての意見も論じられていたようである。司馬光に対して歐陽脩が、世の士大夫達が司馬光に期待を寄せていることを述べて手紙を締めくくっていることから、歐陽脩にとって司馬光は、認めるに堪える人物として意識されていたことが分かるのである。司馬光が歐陽脩を敬慕したのも、この尊敬する文人の期待を受けたことも大きく影響したことであろう。

注

- (1) 拙稿「司馬光の洛陽退居生活とその文学活動」(『日本中国学会報』六〇、二〇〇八年)を参照。
- (2) 劉德清『歐陽脩紀年録』嘉祐三年の条を参照。
- (3) 王安石「明妃曲」に対する歐陽脩・司馬光の唱和詩については、内山精也「明妃曲考(上・下)」(『橄欖』五・六、宋代詩文研究会、一九九三・一九九五年)に詳しい。
- (4) 該当する原文は次の通り。「公(孫甫)弟子崇信令察、示光以歐陽所課公墓誌。光誦之、怳然如復見公得侍坐於傍也。」(司馬光『温公文集』卷七九、「書孫之翰墓誌後」)
- (5) 原文は次の通り。「今尊伯父既有歐陽公為之墓誌。如歐陽公司謂声名足以服天下、文章足以傳後世矣。他人誰能加之。愚意区区欲願足下止刻歐陽公之銘、植於隧外以為碑、則尊伯父之名、自可光輝於無窮。」
- (6) 劉德清『歐陽脩紀年録』治平元年の条、及び程民生『宋代地域文化』(河南大学出版社、一九九七年)第四章「科挙制反映的地域文化差異」二二七～二三〇頁を参照。
- (7) 小林義廣『歐陽脩 その生涯と宗族』(創文社、二〇〇〇年)第六章「濃議論争―あるべき国家像を求めて」を参照。
- (8) 注7所掲書、附篇第二章「馮道論 歐陽脩と司馬光」には、司馬光と歐陽脩にとっての国家観に違いが見られることが述べられている。小林氏に拠れば、前者は「国家主義説」であり、後者は「皇帝機関説」であるという。また司馬光と歐陽脩は共に歴史家でもあり、『春秋』に深い関心を寄せているが、経書観について

は意見の違いが見られる。武内義雄『中国思想史』(岩波書店、一九四一年)第二章・春秋学を参照。

- (9) 注7所掲書、第九章「歐陽脩における族譜編纂の意義」小結及び注五九を参照。
- (10) 歐陽脩が公正な態度を心がけていたことについては、『三朝名臣言行録』卷二・「歐陽脩」の条に次のようにある。「公(歐陽脩)自云学道三十年、所得者、平心無怨惡爾。」
- (11) 原文は次の通り。「詩話尚有遺者。歐陽公文章名聲、雖不可及、然記事一也。故敢統書之。」なお本文は、李裕民・佐竹靖彦共編『増広司馬温公全集』卷一〇六(汲古書院、一九九三年)に拠った。
- (12) 『六一詩話』と『統詩話』の内容の比較については、豊福健二「歐陽脩・司馬光・劉攽の詩話書」(『中国中世文学研究』四五・四六合併号、二〇〇四年)に詳しい。また、『統詩話』については、許山秀樹・松尾肇子・三野豊浩・矢田博士の四氏による『温公統詩話』訳注稿(愛知大学語学教育研究室紀要「言語と文化」九、二〇〇三年八月)がある。
- (13) 湯淺陽子「蘇軾の吏隠―密州知事時代を中心に―」(『中国文学報』四八、一九九四年、七八～八四頁)に同氏は、歐陽・司馬の両者が、白居易における閑適のあり方を意識したとする。
- (14) 歐陽脩と司馬光の号が白居易の詩に基づくことは、南宋・龔頤正の『芥隱筆記』「楽天詩」の条に指摘がある。原文は次の通り。「醉翁、迂叟、東坡之名、皆出於白樂天詩云」。因みに白居易の「醉翁」の語は、白居易「病中詩十五首・別柳枝」(『白氏文集』卷六八)に見える。

- (15) 宋人の雅号と文人生活との関わりについては合山究氏に專論があり、北宋において士大夫が雅号を名乗るようになった嚆矢は歐陽脩であるとの指摘がある。同氏の「雅号の流行と宋代文人意識の成立」(『東方学』三七、一九六九年、八七頁)を参照。
- (16) 注7所掲書、二六〇～二六二頁を参照。
- (17) 「迂叟」と号したが、王安石との政治的闘争に敗れ、洛陽に退居した司馬光にとって輜晦であったことについては、注1所掲拙稿を参照。
- (18) 司馬光の「真率会」については、木田知生『司馬光とその時代』(白帝社、一九九四年)並びに、注1所掲拙稿を参照。
- (19) 王水照「北宋洛陽文人集団与地域環境的關係」(『王水照自选集』所収、上海教育出版社、二〇〇〇年、一五五～一五六頁)を参照。
- (20) 原文は次の通り。「正献公守穎時、趙康靖公概自宋訪歐陽公於穎。与公二人会燕於歐陽公第、因名其堂曰、会老堂。」
- (21) 李之亮『北宋京師及東西路大郡守臣考』(巴蜀書社、二〇〇一年)に拠る。
- (22) 原文は次の通り。「近叔平、自南都惠然見訪。此事古人所重、近世絶稀、始知風月属閑人也。呵呵。有会老堂三篇。方刻石統納。」
- (23) 歐陽脩の「会老堂」詩は、『文忠公集』卷五七「外集」卷七に見える。
- (24) 韓琦「聞致政趙少師遠訪歐陽少師于穎川」(『安陽集』卷一七)に、「洛社成図茲易合、越溪回權彼何情」と詠われている。
- (25) 原文は次の通り。「伏惟致政觀文少師、全德難名、巨材不器、事業三朝之望、文章百世之師。(中略)而乃力辞於未及之年、退托以不能而止。大勇若怯、大知如愚、至貴無軒冕而榮、至仁不導引而壽。較其所得、孰与昔多。軾受知最深、聞道有自。雖外為天下惜老成之去、而私喜明哲保身之全。」
- (26) 洪本健『醉翁的世界 歐陽脩評伝』(中州古籍出版社、一九九〇年、二〇一頁)を参照。
- (27) 注15所掲、合山氏の論文に既に指摘されている(八七頁を参照)。
- (28) 原文は次の通り。「迂叟謝曰、叟愚、何得比君子。自樂恐不足。安能及人。况叟之所樂者、薄陋鄙野、皆世之所棄也。雖推以与人、人且不敢。豈得強之乎。必也有人肯同此樂、則再拜而獻之矣。安敢專之哉。」
- (29) 原文は次の通り。「唯意所適、明月時至、清風自來。行無所牽、止無所柅。耳目肺腸、悉為己有。踽踽焉、洋洋焉、不知天壤之間復有何樂可以代此也。」
- (30) 原文は次の通り。「夫天地之間、物各有主。苟非吾之所有、雖一毫而莫取。惟江上之清風、与山間之明月、耳得之而為聲、目遇之而成色。取之無禁、用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾与子之所共適。」なお文末の「適」字は、『経進東坡文集事略』に従い、「食」字を改めた。
- (31) 該当する原文は次の通り。「至於清風明月不用一錢、買玉山自倒非人推。然後見其橫放其所以警動、千古者固不在此也。」(歐陽脩「李白杜甫詩優劣說」『文忠公集』卷二九「筆說」卷一)。なお、歐陽脩の「清風明月」については、森博行「歐陽脩と邵雍——地上の仙界をめぐる——」(『大谷女子大学紀要』三六、二〇〇二)

年)に詳しい。

(32) 該当する原文は次の通り。「会老堂口号曰、『金馬玉堂三字士、清風明月而閑人』。初謂清風明月、古通用語。後讀『南史』謝諶傳、曰、入吾室者、但有清風。对吾飲者、惟当明月。歐陽文忠公文章、雖優辭亦精緻、如此。」(南宋・許顛『彦周詩話』)

(33) 原文は次の通り。「昔者、王子猷之愛竹、造門不問於主人。陶淵明之臥輿、遇酒便留於道士。況西湖之勝概、擅東顧之佳名。雖美景良辰、固多於高会。而清風明月幸屬於閑人。並遊或結於良朋、乘興有時而独往、鳴蛙暫聽。安問属官而属私。曲水臨流、自可一觴而一詠至歛。然而会意亦傍若無人。乃知偶來常勝於特來、前言可信。所有雖非於己有、其得已多。因讎旧閱之辭、写以新声之調、敢陳薄伎、聊佐清歛。」

(34) 「西湖念語」は歐陽脩が皇祐元年に制作した後、晩年に手を加えたものと見なされている。劉德清『歐陽脩紀年録』皇祐元年の条を参照。

(35) 注15所掲、台山氏の論文に既に指摘されている。

(36) 歐陽脩「尺牘」に対する大野修作氏の解題に拠る(『中国書道全集』五・宋一所収、平凡社、一九八七年、一七五頁)。

(37) 該当する原文は次の通り。「脩啓。脩以衰病餘生。蒙上恩寬假、哀其懇至、俾遂歸老。自杜門里巷、与世日疎。惟窃自念、幸得早従当世賢者之遊、其於欽嚮德義、未始少忘於心耳。近張寺丞自洛來、出所惠書。其為感慰、何可勝言。因得仰詞起居、喜承宴処優閑、履況清福。春候暄和、更冀為時愛重。以副搢紳所以有望者、非独田畝垂尽之人区区也。不宣。脩、再拜。端明侍読留台執事三月初二日。」なお原文は、注36所掲書に拠った。